

# 大学生の結婚に対する意識 (3)<sup>1</sup>

## — 性格・結婚観・性役割観の相互関連 —

筑波大学大学院 (博) 心理学研究科 遠藤 公久

立正大学短期大学部 山根 一郎

筑波大学心理学系 堀 洋道

### Views of university students on marriage (3)

Kimihisa Endo (Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba, 305, Japan).

Ichiro Yamane (Risho's Junior College, Kumagaya, Saitama, 306-01 Japan)

and Hiromichi Hori (Institute of psychology, University of Tsukuba, Tsukuba, 305, Japan)

Seventy-nine university students were requested to respond three questionnaires: their own personality and the desirable personality of their ideal spouse in future, their views on married life, and their views on gender roles in husband and wife. This research was conducted to investigate the mutual relation of these aspects. The main results were as follows:

- 1) Subjects' own personality was much more related with their views on married life than with their views on gender roles in husband and wife.
- 2) Subjects' views on married life, except for "responsibility as a parent", were only weakly related with their views on gender roles.
- 3) Those who made much of husband-centered gender roles were more extraverted and wished for "obedience" to their partner as an idealized spouse.

Key words: marriage, personality, gender role, adolescence, spouse.

### 【問 題】

本研究は、前回報告した遠藤・山根・堀 (1990)、および堀・山根・遠藤 (1990) の一連の研究に続くものである。遠藤ら (1990) は、「暗黙の性格の相性観」ともいえる側面について、自分および希望する結婚相手のそれぞれの性格を調べることで検討している。ここでは、相性観を自他の類似性、相補性、理想性という側面から検討した。また、特に男女の実態像と希望像とのズレにも着目した。堀ら (1990) は、性役割観や家庭観を取り上げ、とりわけ性差に

ついて検討を加えた。その結果、遠藤ら (1990) では、性格の類似性が相性観の最も大きな要因であることがわかった。さらに、希望像と実態像とのズレは、男性よりも女性のほうが大きいことがわかった。この希望像と実態像の乖離は、広範囲にわたっており、そのなかでも顕著な特徴は、女性は男性に気持ちの切り替えや、けじめ、潔さを希望しているのに、男性自身はその全く反対の傾向が強いと回答していたことであった。また、堀ら (1990) では、旧来の家父長的な結婚観は男性よりも女性のほうにおいて脱却されてきていることがわかった。これは、現代の女性の社会的地位の向上を反映しているものと考えられる。

これら一連の研究では、対象者は性格に関する質

1. 本研究は、故竹村研一筑波大学心理学系教授との共同研究の一環であった。

問紙,あるいは性役割観に関する質問紙,あるいは家庭観に関する質問紙,のいずれかに回答するように求められた。したがって,上述した一連の研究結果は,別々な対象者のものであった。そこでは,3側面(性格,性役割観,結婚観・家庭観)の相互の関連については検討されていない。そこで,本研究では,この相互の関連性について報告をすることを目的とする。

## 【方法】

**対象者** 大学生79名(女子53名)

### 質問紙の構成

①性格特性に関する質問紙:遠藤ら(1990)と全く同じ質問項目で,『外向性』『従順性』『神経質』『自己中心性』『他者配慮』『基本的信頼性』『軽躁的同調性』『執着気質性』『物事への几帳面性』の9のクラスターから構成されている。これは,さらに下位尺度項目として,すべてで20の諸特性から構成されている(社交性,リーダーシップ,適応力,経済観念,主張性,決断力,固執,けじめ,協調性,情緒安定性,誠実さ,自他尊重心,自己開示,感受性,軽躁性,同調性,忍耐力,計画性,実行力,清潔感)。全部で100項目からなり,これらについてそれぞれ,「自分について」あてはまると思われる程度,および「結婚相手の性格として」希望する程度についてともに4件法で評定を求めた。

②結婚観・家庭観に関する質問紙:堀ら(1990)を用い,結婚の目的,結婚式,夫婦間のコミュニケーション,子どもへの態度,離婚に対する態度など60項目を4件法で評定させた。本研究の前に,堀ら(1990)の資料をもとに,遠藤ら(1990)と同様のクラスター分析(斜交成分分析:oblique component analysis)を実施した。クラスター数の選択の際に,最大固有値=1.0を基準にしたところ,19クラスターが形成された。それを,さらにまとめた結果,大きく6つのクラスターに分類することができた。それらは,『家族一体感』(「温かさ」「厳しさ・けじめ」),『対外的つきあい重視』(「対外的つきあい」「核家族化傾向」),『親としての責任』(「子どもへの管理責任」「離婚の抑制」),『家の対面重視』(「世間体」「性的役割関係」「よい子はわが子」),『保守的家族観』,『結婚の原点の模索』(「結婚式のあり方」「相手のマイナス要因への不満」),と命名された。各クラスター項目は,Table 1に示した通りである。

③性役割観に関する質問紙:堀ら(1990)と同じ項目で,家庭内でみられる役割行動と家庭内のコミュニケーション行動を中心に,夫,妻それぞれについ

て50項目ずつ計100項目,4件法で評定された。結婚観・家庭観と同様に,堀ら(1990)の資料を基に,クラスター分析をした。しかしその際,堀ら(1990)が報告したジェンダー項目(夫と妻の双方に共通する各36項目対)だけを取り上げ,各項目の夫に対する回答と妻に対する回答との差をとり,それをクラスター分析した。したがって,分析ではこの共通項目を除いた28項目は,分析の対象にできなかった。Table 2には,各クラスター項目を示した。

### 手続き

上記3種類の質問紙を同一対象者に配布し,同時に回答するように求めた。

## 【結果と考察】

### 1. 性格特性と結婚観・家庭観との関連

遠藤ら(1990)において報告されたように,本研究で扱われた性格特性は大きく9クラスターから構成されていた。また,結婚観・家庭観については,大きく6クラスターに分類することができた(Table 1)。これらの関連を検討するために,単相関であるピアソンの積率相関係数を算出する方法ではなく,性格が結婚観・家庭観を規定するという仮説の基に,性格特性の9クラスターを説明変数とし,また結婚観・家庭観の各クラスターを目的変数として,重回帰分析(一括投入)をおこなった。各クラスター間で関連性の大きさを比較するために,標準偏回帰係数を算出した。Fig. 1には,5%で有意差のみられた係数のみを示した<sup>2</sup>。

これをみると,『家族一体感』と最も関連性の高い性格特性クラスターは『基本的信頼感』であった。『家族一体感』は,家族のつながりを温かさや厳しさという面から重視しようとする。そこには家族を信用しようとする,また信用できる家族になることを志向した価値観がある。『基本的信頼感』のように,相手を信用し,心を開こうとしている者は,このような家族の一体感を重視しようとしているといえる。自己開示や感受性の高い者は,家族的な一体感を重視していることがわかった。また,『基本的信頼感』や『軽躁的同調性』の高い者は,『対外的つきあい重視』を重視する傾向がみられた。反対に,神経質の一面ともいえる『物事への几帳面性』は,『対外的つきあい重視』とは負の関連性がみられた。『物事への几帳面性』に反映される性格は,どちらかという内向的で安定志向であり,外界に刺激を

2. Fig. 1が繁雑になるので,ここではとりあえず5%の危険率を基準に設けた。

Table 1 結婚観・家庭観の項目（クラスター分析の結果）

## I. 『家族一体感』

## 「温かさ」

7. たとえお見合いでも結婚するまでに相手を好きになるまで付き合うべきだ。
8. 夫婦の間では、どんな隠し事もするべきでない。
32. 家族全員が一緒に楽しめる趣味やスポーツをもつべきだ。
40. 子どもが小学生のうち、勉強より遊びのほうが大切だ。
41. 結婚したら家庭生活は生活のなかでもっとも重要な部分だ。
57. 夫婦は、仲の良い友人のようでありたい。

## 「厳しさ・けじめ」

6. 夫婦の間では、たとえけんかになっても、自分の本当の気持ちや意見を伝えるべきだ。
15. 家族の間でも、あいさつはきちんとするべきだ。
37. 夫婦どちらかの親と同居しても、子育てをその親に任せるべきではない。
48. 家庭生活よりも仕事や付き合いが大切だ。 —
53. 結婚したら、親からの金銭の援助はあてにすべきではない。

## II. 『対外的ついあい重視』

## 「対外的つきあい」

14. 家族そろって食事をするのは大切だ。
19. 借金や夫婦仲が良くないために子どもを親の自殺の道連れにするのは良くない。
23. 近所でお祭りなどがあつたら、寄付や手伝いなどの協力をするべきだ。
30. 新しいところへ引っ越したら、夫婦で近所にあいさつに回るべきだ。
54. 結婚相手の親は自分の親と同じつもりで接したい。
55. 結婚後の近所づきあいはなるべく少なくしたほうが良い。
60. 親戚づきあいは大切にしたい。

## 「核家族傾向」

9. 夫婦といえども、相手を完全に理解するのは無理だ。 —
13. 子どもはたくさん産んだほうが良い。
20. 夫婦の間でも、子どもが欲しくないときに妊娠したら、妊娠中絶するべきだ。
36. 夫婦どちらかの親と同居しても、なるべく別な暮らしかたをするほうがよい。

## III. 『親としての責任』

## 「子どもへの管理責任」

5. 夫婦は、男の子にも女の子にもできるかぎり高い教育を与えるべきだ。
12. 親は子どもに行儀やマナーを厳しくしつけるべきだ。
21. たとえどんな理由でも、夫が妻に暴力をふるうのは良くない。
45. 子どもがよその子どもにいじめられたら、親はその子の親にはっきりと抗議するべきだ。
51. 子どもをいつつくるか、何人つくるかなどは前もって夫婦の間で決めておくべきだ。

## 「離婚の抑制」

10. 子どもが生まれたら、離婚はできる限りするべきでない。
28. 夫婦は、気持ちが通じなくなったと思ったら、子どもがいても離婚したほうが良い。
43. 結婚するつむりの男女は、結婚する前に性的関係をもったほうが良い。
59. 家庭内の祝い事は派手にやりたい。 —

## IV. 『家の対面重視』

## 「世間体」

1. 結婚では、子どもを産んで家系を絶やさないことが大切だ。
22. 成人した子どもの不始末のために、親が仕事をやめたり、家や土地を売ったりしてつぐなうのは当然のことだ。
25. 子どもが結婚するまでは、子どもがすることは親の責任だ。
29. 結婚適齢期を過ぎてても独身でいるのは世間体が悪い。
58. 夫婦は、お互いに結婚前の交際相手のことを話すべきだ。

## 「性的役割関係」

2. 結婚では、セックスの満足が大切だ。
4. 夫婦は、はじめあまり好きでなくても一緒に暮らすうちにうまくいくようになるものだ。
11. 夫婦といえども、多少の遠慮はあるべきだ。 —
31. 男の子は男らしく、女の子は女らしく育てるべきだ。

## 「よい子はわが子」

33. 妊娠したとき、子どもに異常があるとわかったら、中絶するべきだ。
35. 重い障害をもった子どもを親が殺して、自分も死ぬのはやむを得ない。
38. たとえ本心は違っていても、子どもに対して夫婦は同じ態度をとるべきだ。
39. 子どもへの体罰は必要だ。 —
52. 子どもができないことが離婚の原因になるのは当然だ。

## V. 『保守的家庭観』

16. 恋愛結婚のほうが見合い結婚よりも、結婚後の生活がうまくいかない。
24. 結婚は、双方の親の賛成を得てからするべきだ。
27. 子どもは、どんなに歳をとっても親の意見には従うべきだ。
34. 男の子にも家事の手伝いをさせるべきだ。 —
42. 妻は、夫の親と同居していなくても、自分の家庭よりも夫の家を大切にするべきだ。
50. 婚約したら、両者の結納はきちんとするべきだ。
56. 自分と家柄が違いすぎる男女の結婚はうまくいかない。

## VI. 『結婚の原点への模索』

## 「結婚のあり方」

17. 自分がお金や毎日の生活の面倒をみていない親からの遺産は期待するべきでない。
18. 結婚式は、多少の無理をしても多くの人を招いて盛大にやるべきだ。 —
26. 結婚の費用は式や住まいも含めて、当人たちがすべて払うべきだ。
46. 結婚式や披露宴は質素なほうが良い。
49. とくに宗教を信じていないのなら、教会や神前での結婚式は不要だ。

## 「相手のマイナス要因への不満」

3. 結婚では、遺伝による子どもへの影響について慎重に考えるべきだ。
47. 夫婦は相手に不満があったら、子どもの前でも相手にそれをはっきり言うべきだ。

---

注) —印は反対の方向を示す。

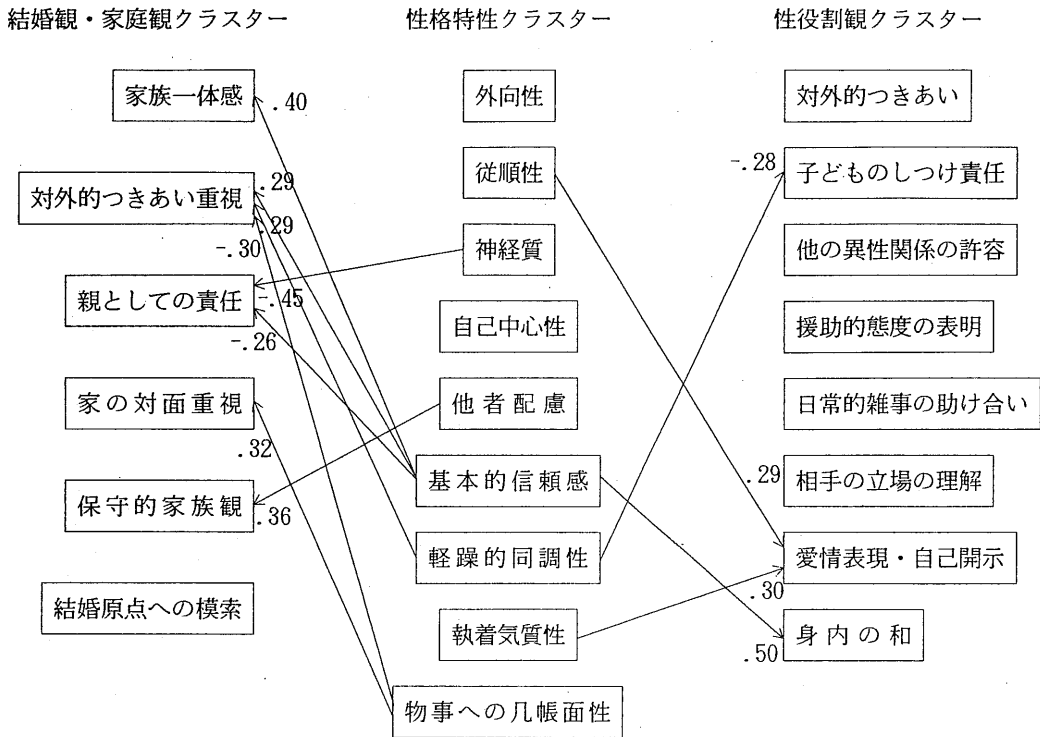


Fig.1 性格特性と結婚観・家庭観および性役割観との関連（標準偏回帰係数）

求めるというよりも自分の世界を大切にしている性格傾向である。そのために、『対外的つきあい重視』とは相反するため、負の関連性がみられたと考えられる。『親としての責任』へ有意に寄与していた性格特性クラスターは、『神経質』と『基本的信頼感』であった。ともに負の関連性を示した。この一見意外な結果は何を意味するのであろうか。『神経質』の項目は主に、過去の好ましくない出来事へのこだわりやそのとき受けたネガティブな感情を、自分だけでなく他者に対しても長く持ち続ける傾向を測定しようとしている。それに対して、『親としての責任』の項目では、子どもへの積極的なしつけや夫婦間での離婚の抑制をよしとするように、ポジティブな家族維持の機能を反映している。したがって、『神経質』と『親としての責任』との間に負の関連性がみられたことは首肯できるのである。また、『基本的信頼感』の項目は、自己開示や感受性を測定しようとしたものである。したがって、相手を信用し自分の弱さを表現するこの行動傾向は、『親としての責任』のように、威厳・厳格といった父性原理の側面とは相反するものといえよう。したがって、双方に負の関係がみられたと考えられる。次に、『家の対面

重視』についてみていくと、最も寄与していたのは『物事への几帳面性』であった。『家の対面重視』は、複合的なクラスターであり、いくつかのレベルが考えられるが、その基底をなすのは、自分や夫婦、また子どもが人からどのようにみられているかということへの意識である。『物事への几帳面性』は、安定志向で几帳面な傾向であるから、評価懸念の高さを示すとも考えられ、『家の対面重視』のような結婚観・家庭観と正の関連性がみられたのだと思われる。また『保守的家族観』に最も寄与していたのは『他者配慮』であった。『保守的家族観』は、伝統的な結婚のあり方に重きを置く意識である。成功する結婚とは、家柄を重んじ、お見合いをし、双方の親の祝福を得、夫中心の家庭を築くことである、とする。そして、『他者配慮』は、周囲の人との「和」を重んじ、円滑な人間関係を求める行動傾向である。したがって、『保守的家族観』のような周囲との調和を反映する結婚観・家庭観の正の関連性が強くみられたのであろう。『結婚原点への模索』に有意に寄与している性格特性は見いだされなかった。この新しい結婚観・家庭観は、本研究で対象にした結婚予備軍としての大学生の全体的な傾向であるため

に、ある特定の性格特性と独自の連関がみられなかったものと思われる。

## 2. 性格特性と性役割観との関連

性役割観は、8クラスターにまとめられた (Table 2)。1. と同様に、仮説モデルとして、性格が性役割観の形成に影響を与えると考え、性役割観を目的変数、性格特性を説明変数として重回帰分析 (一括投入法) を行った。その結果、Fig. 1 が示すように、全般的に性役割観に有意に寄与している性格特性クラスターは少なかった。その中で、5%水準で有意性のみられたのは、『子どものしつけ責任』における『軽躁的同調性』、『愛情表現・自己開示』における『従順性』および『執着気質性』、また『身内の和』における『基本的信頼感』であった。

前述したように、ここでのクラスターは、夫の役割であるとする評定値から妻の役割であるとする評定値を差し引いた上でまとめられたものである。したがって、正の関連性がみられるということは、その性役割分担が夫のほうにあるべきだという方向を示している。『子どものしつけ責任』と『軽躁的同調性』に負の関連がみられたことは、『軽躁的同調性』のように、一人でいることを嫌い、おしゃべりで、人の和を大切に、組織の一員としていることを好む人ほど、子どものしつけを妻の役割であると評定していた。これは、評定者の女性性が反映されたものであろうか。また、人前で自己主張することが苦手、どちらかというあまり目立たないことを好む従順な人、または (かつ) 一度決めたことは忍耐強く、計画的に実行し、最後まで遂行する、ポジティブな意味での執着的な人ほど、愛情表現や自己開示 (開放) が妻以上に夫の役割であるべきだと評定していた。これは、女性は一般に愛情表現が受身的であるからだと推測される。さらに、相手を信用し、自己開示である基本的信頼感の強い者ほど、いざというときの支援的な態度や家族・近隣の人たちとの和が夫の役割であるとしている。しかし、このクラスターは、『援助的態度の表明』と意味的に識別がしにくく、検討の余地が残る。

## 3. 結婚観・家族観と性役割観との関連

この双方には、仮説的モデルが考えられない。そこで、各クラスターどうしの関連を調べるために、ピアソンの積率相関係数を算出した。その結果、『親としての責任』と『対外的つきあい』との間 ( $r = -.33$ ,  $p < .01$ )、『子どものしつけ責任』との間 ( $r = -.38$ ,  $p < .01$ )、『身内の和』との間 ( $r = -.22$ ,  $p < .05$ ) に、それぞれ有意な相関が認められた。さらに、『結婚

原点への模索』と『子どものしつけ責任』との間に5%水準で有意な正の相関関係がみられた ( $r = .28$ )。すなわち、こどもに高い教育やマナーを厳しくしつけ、子どものためにも離婚すべきでないと思っている人ほど、親戚や世間つきあいは妻の役割であり、また子どもの金銭面やしつけは夫より妻の役割であるとしており、いざというときの両親の面倒なども妻の役割であると評定している。さらに、結婚式も質素で、親を期待せず、二人の結婚の原点を大切にしようとする人ほど、子どものしつけは夫の役割であるとしていた。

全体として、相互の関連性は高くなく、おもに結婚観・家庭観における『親としての責任』が性役割観とつながりを示していた。

## 4. 性役割観のズレについて

### (1) 自分の性格特性および結婚観・家庭観との関連

性役割観は、内容的に8クラスターに分類された。しかし、このクラスターの中には、夫の役割であるべきだとする項目 (36対の項目のなかで差の平均値がプラス) と、妻の役割であるべきだとする項目 (差の平均値がマイナス) とが、混在した状態で含まれている。Table 3 に、性役割観の各クラスターの基本統計量を示した。これをみるとわかるように、クラスターのメンバーの合計平均値からすれば、8クラスター中、6クラスターが夫の役割であるべきだとしていた。残りの2クラスター (『他の異性関係の許容』、『日常的雑事』) だけが、妻の役割とするクラスターであった。このように、夫としての役割のほうが妻としての役割に比べ、多いことが特徴である。大学生においては性役割のあり方として、男性のほうにより多くのことが求められていることが示唆される。これは、現代青年において、男性と女性 (夫と妻) の性役割の境界が曖昧となってきていることを反映するものであろう。また、本研究では、対象者の男女比 1 : 2 と女子のほうが多く、その結果、夫の役割であるとする方向への評定が偏向したものと考えられる。実際、夫役割とも妻役割ともつかない中立的な役割項目 (全36項目の全体平均からみて上位25%と下位25%を除いた18項目) において、性差を検定したところ、女子のほうが男子よりもこれらの項目に対して夫の役割と評定する傾向が強かった ( $t = -2.06$ ,  $df = 31.6$ ,  $p < .05$ )。

次に、36対の全体役割観項目 (ジェンダー項目) を合計し、その平均値から対象者を夫の役割である方へと偏向している上位25% (夫役割群) と、反対に妻の役割である方へと偏向している下位25% (妻役割群) と、そして残りの50% (中立役割群) との

Table 2 性役割観共通項目のクラスター分析結果

---

『対外的つきあい』

12. 自分の親戚と進んで交際するべきだ。
16. なるべく世間付き合いをひかえ、家族サービスに専念するべきだ。
25. 相手の習癖・礼儀作法・服装などを注意しておさせるべきだ。

『子どものしつけ責任』

1. 子どもが困っているとき自分が相談にのってやるべきだ。
8. 自分がサイフを管理するべきだ。
10. 子どものしつけかたは自分が決めるべきだ。
20. 子どものおこずかいの額は自分が決めるべきだ。
33. 自ら子どものしつけを行うべきだ。

『他の異性関係』

3. たとえ相手の異性の友人が訪問してきても、気持ちよく迎えるべきだ。
14. 相手が少々の浮気をするのを認めるべきだ。
22. 結婚前に相手以外の異性と性体験をもっていたほうがよい。—
36. 性生活のペースは、自分が相手に合わせるべきだ。—

『援助的態度の表明』

2. 自分の親戚が金銭的に困っている場合には援助してやるべきだ。
6. 相手の親戚が金銭的に困っている場合には援助してやるべきだ。
11. 相手が何事かで決定に迷っている場合には相談にのってやるべきだ。
30. 相手が疲れているときは、ねぎらいの言葉をかけるべきだ。

『日常的雑事』

13. 自分自身の布団をあげさげをするべきだ。
15. 棚の取り付けや簡単な修理くらいはするべきだ。—
17. 家族で旅行や行楽に行くかどうかは自分が決めるべきだ。—
31. PTAに出席するべきだ。
35. 避妊の責任をもつべきだ。—

『相手の立場の理解』

4. 人が相手に対して文句を言うときには、必ず相手の味方になるべきだ。
5. 相手の親戚と進んで交際するべきだ。
9. 自分がセックスを欲しても、相手が応じないときは我慢するべきだ。—
19. 相手以外の異性とも気軽に話し合うべきだ。
32. つらいことがあるときでもユーモアを示すべきだ。
34. 相手のグチを聞いてやるべきだ。

『愛情表現・自己開示』

7. 家庭外であったことをちゃんと相手に話すべきだ。
27. 人を招こうとしたり、人に招かれたりしたときは、相手に相談するべきだ。
29. 一日に一回は抱擁またはキスなどの愛情表現をするべきだ。

『身内の和』

18. 必要ならば相手の両親の日常の世話をするべきだ。
21. 自分の転職や退職を相手に相談しないで自分で決めるべきだ。
23. 余暇を家族と一緒に楽しむべきだ。
24. 近隣の人たちと進んで交際するべきだ。
26. 相手の関心や特技などを認め奨励するべきだ。
28. 必要ならば自分の両親の日常の世話をするべきだ。

---

注) 一印は、夫の役割とする評定値よりも妻の役割であるとする評定値のほうが大きかったことを示す。

Table 3 性役割観クラスターの基本統計量

	人数	平均	標準偏差	範囲	役割責任
対外的つきあい	79	0.936	1.741	11(-5.0~6.0)	夫>妻
子どものしつけ	79	1.531	2.495	12(-4.0~8.0)	夫>妻
他の異性関係許容	79	-0.367	1.833	12(-7.0~5.0)	夫<妻
援助的態度の表明	79	0.278	1.176	7(-4.0~3.0)	夫>妻
日常的雑事	79	-0.658	2.062	10(-6.0~4.0)	夫<妻
相手の立場の理解	79	0.316	2.589	16(-9.0~7.0)	夫>妻
愛情表現・自己開示	79	0.417	1.093	6(-2.0~4.0)	夫>妻
身内の和	79	0.886	1.717	9(-4.0~5.0)	夫>妻

役割責任では、平均がプラスの場合に夫の役割、マイナスの時は妻の役割として記した。

3群に分けた。そして、結婚観・家庭観の各クラスター、および性格特性の各クラスターについて、この3群における平均値の検定を行った。その結果、結婚観・家庭観ではどのクラスターも有意差はみられなかった。また、性格特性では、『外向性』(F=5.48, df=2/76, p<.01), 『従順性』(F=3.12, df=2/76, p<.05), 『神経質』(F=4.11, df=2/76, p<.05)において有意差がみられ、『基本的信頼感』において傾向がみられた(F=2.81, df=2/76, p<.07)。多重比較(LSD)を試みたところ、『外向性』では、夫役割群が中立役割群よりも5%で有意に大きかった(それぞれM=34.00, M=29.62)。夫中心の役割観をもっている者は、夫と妻が共に協力するべきだという中立的な役割観をもっている者よりも、社会的であったり、リーダーシップをとる行動傾向をもっていた。『従順性』では、中立役割群のほうが夫役割群よりも有意に大きかった(M=30.74, M=26.77)。『外向性』と『従順性』は反対の傾向を示したことになる。さらに、『神経質』においては、中立役割群>夫役割群>妻役割群の順で有意に大きかった(M=31.48, M=28.40, M=27.77)。以上のことより、夫と妻の役割をあまり区別しない中立役割群には、あまり目立たないことを好み、どちらかという固執(こだわり)的傾向がみられた。また、夫中心の役割観を有する者に社交性やリーダーシップなどの外向的な性格傾向が高かった。一方、妻中心の役割観を持つ者には、特徴的な性格傾向はみられず、他の2群のほぼ中間に位置していた。夫役割群と中立役割群の性格傾向が一見矛盾しているように見える。夫中心の性役割観をもつ者には、むしろ従順的な性格傾向が高いように思われる。その理由として、夫役割群に外向的な性格傾向が高かったのは、自己の性格が

外向的であるがゆえに、男性ならば自分の役割として、女性ならば相手により多くのことを期待していたためであると考えられる。

#### (2) 自分の性格特性と結婚相手に求める性格特性の差との関連

結婚相手に希望する性格と自分の性格とのズレについては、既に遠藤ら(1990)が検討している。ここでは、4(1)と同様に性役割観のズレに着目し、自分と相手の性格のズレとの関連を検討した。

自分の性格から希望する相手の性格の差を各クラスターごとに求め、4(1)のように性役割観のズレを説明変数として一元配置の分散分析を行った。その結果、有意差がみられたのは『外向性』での差(F=4.49, df=2/76, p<.05), 『基本的信頼感』での差(F=6.43, df=2/76, p<.01)であった。そして、『従順性』では有意に近づいた(F=2.30, df=2/76, p<.10)。そこで、多重比較(LSD)を実施したところ、『外向性』においては、夫役割群>中立役割群=妻役割群(M=8.59, M=4.57, M=4.09)という関係であった。すなわち、夫中心の性役割観をもっている人、また夫中心の性役割行動を夫に多くを求めている人は、結婚相手に求める以上に自分自身が外向性(社交性やリーダーシップなど)が高いと評定していた。また、『基本的信頼感』においても夫役割群>中立役割群=妻役割群(M=3.42, M=1.14, M=-0.9)であった。夫中心で、夫に多くのことを期待する人は、相手に求める以上に自分は自己開示的あり、感受性が高いと評定していた。有意差はみられなかったものの、『従順性』では夫役割群は他の群よりも相手にこの性格傾向を求めている(夫群:M=-9.27, 中立群:M=-5.60, 妻群:M=-6.18)。



夫役割群は、自分の性格を外向的で自己開示的であるとし、相手には従順であることを希望しているのが特徴的であった。一方、中立役割群や妻役割群にはこのような特徴はみられなかった。

### 【要 約】

性格、結婚観・家庭観、性役割観の相互の関連性を検討するために、遠藤ら（1990）と堀ら（1990）と全く同一の質問紙を、大学生を対象（79名）に実施した。回答は、すべて4件法で評定を求めた。

その結果、性格特性は、性役割観よりも結婚観・家庭観と強く関連していた。特に、性格特性クラスターの『基本的信頼感』は、そのなかでも主要なクラスターであった。結婚観・家庭観における『親としての責任』が、性役割観と関連性が高かったが、一般的に双方の関連は強くなかった。性役割観のズレ（夫の役割－妻の役割）と性格特性とでは、このズレが夫の役割の方に傾いている人ほど、『外向性』

が高く、夫の役割にも妻の役割にも傾かない中立的な性役割観を持つ者は、『従順性』が高く、最も『神経質』であった。自分の性格以上に相手に強く求めている性格クラスターはみられなかったが、『従順性』において、夫役割を中心に据える人ほど、とりわけこの性格を相手に求める傾向がみられた。

### 【引 用 文 献】

- 遠藤公久・山根一郎・堀洋道 1990 大学生の結婚に対する意識(1)  
—性格特性の相性観について— 筑波大学心理学研究, 12, 85-91.
- 堀洋道・山根一郎・遠藤公久 1990 大学生の結婚に対する意識(2)  
—結婚観について— 筑波大学心理学研究, 12, 93-100.

—1990.9.30受稿—